

鮮やかな夏の初体験④～手に伝わる感触。彼女のおっぱい堪能編～

※この作品に登場する人物はすべて 18 歳以上の成人です。実在の未成年・学校・団体とは関係ありません。

「ねえ、孝史」

「ん？何？」

今日も、俺の部屋で勉強をしていた。

机の上には参考書とノートが並び、窓から差し込む夏の陽光が白いページを淡く照らしている。

最近のエッチな日々が続いていたから、さすがに今日は真面目にやろう——そう思って誘ったはずなのに。

無言が続くと、空気が妙にざわつく。

お互いの存在を意識しすぎて、ページをめくる音さえエロティックに聞こえてしまう。

「私達ってさ……」

里桜がぼつりと口を開いた。

「たった一回しか、本番してなくない？」

「……っ」

心臓が跳ねた。

そう言えば、確かにそうだった。

キスも、触ることも、口ですること、ここ最近何度も重ねてきた。

なのに、ゴムをつけて繋がったのは、まだ一度きり。

「……本当だ」

「でしょ？ お互いちゃんと買ってあるのに、まだ一個しか使ってないじゃない」

彼女の声は少しだけ甘くて、少しだけ挑発的だった。

机の下で、俺の指がノートの端を無意識に弄っている。

「じゃ……今からする？」

その瞬間、里桜の表情が一瞬で陰しくなった。

「雰囲気ってものを、ちょっとは考えてよ。今、勉強中でしょ？」

「けど、言い出したの里桜じゃん」

「そうだけどさ……」

視線が絡み、すぐに逸れる。

お互い、頭の片隅にセックスのことが居座っているのがわかっていた。

言葉に出さなくても、体がそれを覚えてしまっている。

「じゃ、また、約束日を決める？」

彼女が提案した。

「うん、そうしよう」

「明日は私、予定あるし……明後日はどう？」

結構、急だな。

この前は俺の誕生日まで我慢したのに。

初回と二回目の差か？

いや、もうエッチなことは何度もしている。

体は、お互いを知り始めている。

「なぜか、ゴムもお互い買ってて、たくさんあるしね」

彼女が悪戯っぽく目を細めた。

つまり、これから何度でもできるということだ。

「正直に言って。里桜って、一回目のエッチ……気持ち良かった？」

彼女は「ん～」と少し考えてから、正直に答えた。

「どっちかっていうと、痛い方が強かったかな？」

「そっか」

俺は静かに頷きながら、心の中で誓った。

彼女を、セックスでちゃんと気持ち良くしたい。
回数を重ねれば、きっと変わる。

よし。

あの大量のコンドームを使い切るくらい、彼女が「気持ちいい」と本気で思うまで、何度でも抱くぞ。

——そして、約束の日。

「いらっしゃい、里桜」

玄関を開けると、今日も夏服を着た彼女が立っていた。

肌の露出は控えめなのに、かえって色っぽい。
頬はほんのり赤い。
暑さのせいかな、それともこれからやることを意識しているのか。

「いつもごめんね、来てもらって」

彼女は徒歩で来る。
近いとはいえ、自転車でもいいのに、いつも歩いてくる。

「今日も暑かった～。早速、シャワー借りるね」
「うん」

靴を脱ぎ、俺の隣をすり抜けてシャワー室へ向かう後ろ姿を、俺は黙って見送った。

飲み物を持って二階の自分の部屋に上がり、待つ。

この時間が、たまらなくドキドキする。

邪念を払うように文庫本を開くが、文字が頭に入ってこない。
数ページをめくっても、内容はほとんど覚えていない。

「シャワー、いただきました」

髪の毛が少し湿った状態で、里桜が入室してきた。

「お粗末様でした。ジュース、入れておいたから」
「ありがとう～」

彼女はグラスに口をつける。

「孝史、何読んでたの？」
「普通の小説だよ」
「見せて」

有無を言わず、栞を挟んだ文庫本を取り上げる。
彼女らしい。

「へえ～、また目がチカチカしそうな本読んでるね」

里桜は本をほとんど読まない。
その代わり、漫画はかなり好きだ。

「簡単な本だよ」
「もう本をそのまま食べちゃいなよ。胃で勝手に読解してくれるよ」

くすくすと笑う彼女に、俺も苦笑する。

「その設定の本、もうあるから」
「へえ、本？」
「本だけど、ラノベだよ」
「ラノベだったら、私読もうかな？ 今日、借りていったいい？」
「うん、いいけど……」

せっかく興味を持ってくれたのだ。
本の良さを、少しでも感じてほしい。

「はい、文庫本ありがと」

彼女が本を差し出してくる。

受け取ろうとした瞬間、彼女は俺の手を握った。

バサリ、と文庫本がテーブルに落ちる。

柔らかい指が、俺の手の甲を、指先を、ゆっくりと撫でる。

「固いけど、触ると心地良い手だなあ……」

動きが、徐々に艶っぽくなっていく。

やがて、恋人繋ぎになった。

彼女の手は、本当に柔らかい。

「孝史ってさあ、私のおっぱい、あんまり触らないよね」

思い返せば、確かにそうだった。

「私の胸に、魅力ない？」

「そんなことないよ！」

慌てて否定する。

「ふうーん、本当かなあ？　ここ最近、私の下半身ばかり責めてない？」

「いや、あれは……」

「あれは？」

悪戯っぽく、俺の反応をじっと観察している。

「おっぱい触る男ってさ、客観的に見て、もの凄く甘えてる感じしない？」

「そうかなあ？」

彼女は首を傾げると、俺の手を自分の胸に押しつけた。

服越しに伝わってくる感触に、心臓が跳ねる。

「あ、ほんとだ。興奮してる」

彼女は安堵したように笑った。

「よかったー。ほんとに魅力がないのかと思ってた～」

「孝史、今日は胸から責めてみてよ」

「う、うん……」

「よし！」

彼女は上の服を脱ぎ始めた。

夏場の薄着だから、あっという間にブラ姿になる。

「今日のは可愛い系にしたよ。孝史が選んでくれたブラにするか迷ったんだけどさ、なんか今日はこっちかなあ〜って思ったんだ」

純白の下着。

白一色ではなく、繊細な花柄が刺繍のように浮かんでいる。

「孝史、ブラの外し方知ってる？」

ニマニマとした表情で聞いてくる。

「正直……自信ない」

「じゃ、今日教えてあげるね。ブラの外し方知らないなんて、まだまだ童貞さんだぞ」

悪戯っぽく言いながら、彼女は俺の手を引っ張った。

「まあ、簡単な話なんだけど、ブラにはホックがあってね。それを外すだけなの。背中に
あるから、ホックを外してみて」

彼女は背中を向けた。

手探りでホックに触れる。

指先が滑り、なかなかうまくいかない。

「ん？ あれ？ これって結構難しいぞ」

「やっぱりね。手こずると思った」

彼女は器用に、あっさりとフックを外した。

「ほら、こうするの。今度はつけてみてよ」

背中に並ぶフックをじっくりと確認する。

ひとつずつ慎重に合わせ、指先に力を込めてはめていく。

「つけれたよ」

「じゃ、今度は外してよ。つけれたのなら、外すのは簡単だよ」

言われた通りにやってみる。

カチャリ。

小さな音とともに、フックが外れる。

「はい、フックはOK。次はブラを外してよ」

彼女が正面を向いた。

里桜はブラのカップ部分を両手で支えている。
両手を離せば、それだけで布は落ちてしまう。

そんな状況なのに、彼女はじっと俺を見つめていた。

俺は肩のストラップに指をかける。

ひとつ。

そして、もうひとつ。

ゆっくりと外していく。

ストラップが落ち、残るは彼女が支えているブラ本体だけになった。

久しぶりに、里桜の胸とご対面できる――。

そう思った瞬間。

「里桜……？」

彼女は、手を離そうとしない。

「へへっ……やっぱり、まだちょっと恥ずかしいや」

真っ赤に染まった頬。
目が少し泳ぎ、いつもより声が小さい。

「里桜の胸、本当に綺麗だから、そんな照れなくていいのに」
「そ、そう……。なら……」

彼女の指が、ほんの少しだけ動いた。

そして――。

****この続きは製品版でお楽しみください。****

二度目の本番を約束した孝史と里桜。

今回、孝史が夢中になるのは、これまであまり触れてこなかった彼女の「胸」。

初々しい二人がブラの外し方を教え合いながら、少しずつ距離を縮めていく。

そして、彼女のブラが外れたその先には――。

****『鮮やかな夏の初体験④～手に伝わる感触。彼女のおっぱい堪能編～』****

続きは製品版にて。